

今年度も引き続き、校長室から日頃の「雑感」をお届けいたします。昨年度は例年以上に数多くの生徒の皆さんが校長室に足を運んでくれ、大会報告や各種イベント案内など、様々なお話を聞かせてくれました。教育活動はもちろん、そうした生徒の皆さんとの談話等も交えながら綴ってまいりますので、ご笑覧いただけましたら幸いです。

One for all, All for one. No.31

R6. 6. 3 「高体連支部予選会が一段落」

5月をもって、この時期に行われる体育系部活動の支部予選会が一通り終了しました。今年度も数多くの生徒の皆さんが、日頃の練習の成果を存分に発揮し全道大会出場への切符を手に入れました。

先陣を切ったテニス部をはじめ、陸上競技部、柔道部、サッカー部については既に5月号でご紹介したとおりの結果となりました。

新たな競技では、男子バスケット部が優勝とこれまでの歴史を塗り替える大活躍を見せてくれました。女子バスケット部も3位と健闘、見事全道大会出場を成し遂げました。



バドミントン部は、男子団体が準優勝、女子団体が3位と男女そろっての全道大会出場となりました。



剣道部は男女ともに準優勝で、こちらも共に全道大会出場となりました。



女子バレーボール部は惜しくも全道を逃しましたが、3年生の 小迫 有花さんが優秀選手賞に選出されるなど、随所に光るプレーが見られました。

6月中旬から全道各地で再び熱戦が繰り広げられますが、支部の代表として全力を出し切ってくれることを心より願っています。

One for all, All for one. No.32

R6. 6. 3 「今年度のPRポスターが完成」



はちきれんばかりの笑顔が、旭川龍谷の高校生活を象徴しているかのようです。

生徒一人一人が個性を伸ばし、伸び伸びとした環境の中で、新しい時代を切り拓いていく人間性を培ってもらうことが私たち教職員の願いです。

在校生自らが考案したポスターも斬新ですが、キャッチフレーズ「龍谷でしか味わえない青春がある」にも、生徒たちの創造性豊かな感性を感じます。

大切な高校生活を是非旭川龍谷高校で過ごしましょうというメッセージ性あふれる素晴らしいポスターに仕上がりました。

One for all, All for one. No.33

R6. 6. 3 「美化活動」

過日、用務を終え学校に戻ると、何やら生徒の皆さんが花壇の土を掘り返しています。

生徒会と有志の皆さんによる「美化プロジェクト」でした。かつて、この場所にはラベンダーが植えられていたようですが、学校移転までの長い期間まったく手をかけられていなかったため、殆どが風化した状態となっていました。

そこに注目したのが生徒会、有志を募り花壇の復活プロジェクトをはじめたわけです。

ラベンダーは既に朽ち果て深い根を残すだけになっていましたので、まずはその撤去から始まります。暑い日差しの中、放課後の時間を利用し沢山の生徒の皆さんが協力してくれました。



自らの手で学校美化に努める姿に、また一つ生徒たちの大きな成長を見た気がします。

One for all, All for one. No.34

R6. 6. 4 「教職員が研修」

教職員を対象とした今年度最初の校内研修会を開催しました。テーマは「生徒の安全対策」についてです。ご多忙の中、旭川市南消防署の皆様にご協力をいただき、救急予防・救命講習を行っていただきました。誠に有り難うございました。



昨今の異常気象を受け大きな課題となっている熱中症や熱射病について理解を深め、その対処法について講義を受けました。また、いざという際のAEDや心肺蘇生についても実践を交え再確認をしました。

生徒の安全は、様々な状況下での冷静な判断と適切な対応によって保たれます。頭での理解だけでなく、実践を交えた研修を常に継続していくことが重要と考えています。

One for all, All for one. No.35

R6. 6. 7 「剣道部、男女そろって全道！」

男女とも接戦のすえ頂点こそ逃しましたが、共に「準優勝」の好成績で全道大会出場を手にしました。男女の両主将と大活躍の一年生にお話を伺いました。

男子主将の3年生 幸田 伊純君は、個人戦でも日頃の練習の成果を發揮し見事優勝の栄冠を手にしました。「最上学年ということもあり、例年以上に気合が入りました。全道大会には、隙のない構えと誰にも負けない強い気持ちを持って臨みます」と、チームの牽引者としての力強い言葉が返ってきました。

女子主将の 松林 央倅さんは唯一の3年生。「個人戦は強豪が集う厳しいリーグでしたが、試合内容には納得していて悔いはありません。全道では後輩たちのお手本になる言動を心掛けチームをまとめていきたいです」と、下級生からの人望も絶大です。

1年生ながら次々と強敵を倒し個人戦3位に入賞した 今井 美桜さんは「前回負けた悔しさを取り返す気持ちで臨みました。気合と精神力で学年差を克服し、声を出すことで緊張を和らげました。現在に満足することなく常に上を目指していきます」と、今後の成長がとても楽しみです。



試合の時の厳しい表情とはうって変わって、とても気さくで笑顔の素敵な3名の皆さんでした。全道大会でも全力を出し切ってくれることを願っています。

One for all, All for one. No.36

R6. 6. 7 「女子バスケット部も全道へ！」

着実に力をつけてきた女子バスケット部ですが、今大会ではライバル校の気迫に押され3位の結果で支部大会を終えました。



キャプテンの3年生 森 ゆず葉さんは「ちょっとした油断から相手に流れを渡してしまいました。全道には強豪チームが集まります。残った時間をリバウンドの強化、パワーやスタミナの克服に充てたいです」と、チームの要としての強い意思が伝わってきます。

バイスカプテンで「ベスト5」賞に選出された3年生 正木 遥さんは「自分の武器であるシュート力を評価してもらった

ことは嬉しいですが、練習してきたことをすべて出し切ることは出来ませんでした」と、全道大会でのリベンジを誓います。

同じくバイスキャプテンの3年生 大川 莉琉さんは「自分たちの良さを出し切れないまま終わりました。全道大会ではチームとしての組織力だけでなく、個々の強みをプレーに積極的に生かせるよう頑張ります」と、次の戦いを見据えます。

静かな雰囲気の中にも気迫漲る強い感情が伝わってきます。全道大会で女子バスケ部が大暴れしてくれる予感が沸いてきました。

One for all, All for one. No.37

R6. 6. 8 「音楽大行進」

「音楽大行進」は今年で 92 回目となる国内最大級のマーチングバンドの祭典です。旭川市など上川管内を中心に約 2,800 名の皆さんが参加し初夏を彩りました。

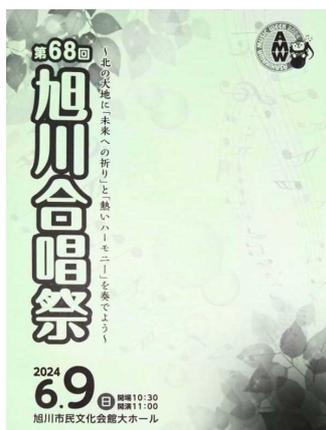
この日は炎天下でしたが、祭典日和とあって沿道は多くの観衆で埋め尽くされていました。本校吹奏楽部も旭川農業高校さんと協力し参加してきました。両校一緒に合わせる時間が殆どない中、持ち前の技術を駆使し息の合った演奏と機敏な隊列の動きで観衆を魅了していました。「旭川農業高校吹奏楽部の皆さん、有り難うございました」

演奏曲は「コパカバーナ」とコンサート・マーチ「ラ・フィエスタ」です。テンポの良い軽快な演奏に、心も晴れやかな気分になりました。



One for all, All for one. No.38

R6. 6. 9 「旭川合唱祭」



旭川市民文化会館で開催された「第 68 回旭川合唱祭」に本校合唱部も参加し、圧巻の演奏を披露してくれました。

今年は「混成合唱とピアノのための組曲〈歌が生まれる時〉から『樹の音』と「さくらももこの詩による無伴奏混成合唱曲〈ぜんぶここに〉から『ぜんぶ』」の 2 曲を演奏しました。

どちらも高度な技術を要する曲かと思いますが、聴衆にじっくりと聞かせる素晴らしい歌声でした。

毎年着実に力をつけ全道も常連となった合唱部、さらに磨きをかけ今後の発表に備えています。次回の演奏会も乞うご期待です。

One for all, All for one. No.39

R6. 6. 10 「男子バスケ部が歴史を塗り替えた！」

男子バスケット部が強豪ひしめく支部大会を見事に制し「優勝」の栄冠を手に入れました。

昨年度から各冠大会で負け知らずとはいえ、高体連はやはり別物。男子バスケット界の長い歴史を創り上げてきた強豪校が、それぞれ万全の状態に仕上がってきます。予想どおり接戦が続き、決勝戦ももつれにもつれ延長戦の末での勝利となりました。

今大会の立役者であり、チームを優勝に導いた二人の中心選手に話を伺いました。

3年生の 豊川 泰徳君は「今大会はチームとしての油断が最初から出てしまい、結果追上げる苦しい展開になってしまいました」と、ゲーム運びの課題について振り返ります。

同じく3年生の 吉岡 優之介君も「仮に技術的に上回っていたとしても、気持ちの面で強い意識を持たなければ結果がついてきません」と、試合の怖さを語ります。

二人とも小学校からバスケットボールに精通してきただけに、競技の楽しさと同時に、勝敗の厳しさも幾度となく経験しているようです。

20日から始まる全道大会に向け、豊川君は「各支部を勝ち抜いてきた強豪校が相手だけに、最初から油断することなく全力で戦い、目標とする決勝まで進みます」と、インターハイ出場への強い気持ちを見せてくれました。

吉岡君も「他のチームは身長がある分、こちらは持ち味のスピードを生かしていきたいです。自分は身長のある選手にいかにか点を取らせないように集中していきます」と、自身の役割への強い責任感が伝わってきました。

ドリブル、シュート、リバウンドなどトータルの高い技術を持っているのですから、そこに二人の言う「強い気持ち」と「スピードを持ち味としたオフェンス・一切の油断を許さないディフェンス」が加われば、必ずインターハイも見えてくるはずです。



One for all, All for one. No.40

R6. 6.11 「追悼会」



全校生徒、教職員が一堂に会し、厳粛な雰囲気漂う中「追悼会」を執り行いました。

この一年間で故人となられた方々と深い縁のある生徒や教職員が壇上でご焼香を行い、故人のご遺徳を偲び、心から追悼の意を表す行事です。

同時に、全校生徒には「生死の問題」について考えることを通して、「積極的な生き方」を模索する機会にもしています。

法話では、理事長の 石田 慶嗣氏が「友人の思いがけない死に直面した時の悲哀を通して、生きていることが当たり前ではなく、生かされていることに『有り難し』という感謝の思いを持つことが大切と痛感しました」と、生死について語られました。

「皆さんとの出会いも縁です。この縁もまた当たり前ではなく『有り難し』なのです。思いがけない人との出会いに感謝し、運命的な鉢合わせに感謝し、積極的に生きることの

大切さを思い出しよう」と結ばれました。

One for all, All for one. No.41

R6. 6.11 「教育実習」

本校OBが7月2日までの3週間、「教育実習」にやってきました。お二人とも現在は大学4年に在籍し、本校では保健体育の授業を通して在校生と貴重な時間を過ごすこととなります。

古川 泰斗先生は駿河台大学のスポーツ科学部に在籍し、スポーツの技能をスポーツ指導者の指導理論に結びつけるなど、主に理論と実践の融合を研究されています。「専門の保健体育以外でも生徒とのコミュニケーションを図り、信頼関係を構築していく中で本来の教育指導力を磨いていきたいと思います」と抱負を語ってくれました。

山岸 雅希先生は八戸学院大学の保健医療学部人間健康学科に在籍し、健康と医療について学際的な見地から総合的に探究し、幅広い分野の研究・指導・実践にあたられています。「スポーツには誰も得手不得手があり、すべてが思いどおりにいくわけではありません。その困り感に少しでも寄り添うことでスポーツが楽しいと思える授業を心掛けていきたいです」と話してくれました。



高校生当時、古川先生は剣道に、山岸先生は野球に打ち込む日々だったそうです。それぞれの競技を通して様々な苦楽を経験する中で、さらにスポーツを深く学ぶために大学への進学を決意されました。現在も同じ競技を続けながら、豊かな人生を送るためのスポーツの在り方を肌で感じ取っているようです。

生徒の皆さんには、お二人の先生の幅広い視野と豊かな知識や感受性に触れる中で、今後の進路を考えるきっかけを掴んでもらいたいと思います。

One for all, All for one. No.42

R5. 6.12 「高体連全道大会」

今週から全道各地で「高体連全道大会」が開催されています。本校からも多くの選手が後に続くインターハイ（全国大会）を目指して出発しました。



旭川市が当番となっているのは陸上競技です。全道各地から支部大会を勝ち抜いてきた選手団が花咲陸上競技場に集結しています。

本校からも男子9種目、女子12種目のフィールド及びトラック各競技にエントリーし、全国

大会を目指します。

14日（金）まで熱戦が繰り広げられていますので、皆様の応援よろしくお願いたします。



R5. 6.13 「開校記念日」

13日（木）は本校の開校記念日になります。5月の連休あたりに設定している学校が多い中、この日を開校記念日としたのには次のような経緯があります。

本校の創始者である慶誠寺三世住職は、現在の理事長の祖父にあたる石田学而氏です。昭和33年4月に本校を開校して以来、「人柄の龍谷」として多くの卒業生を輩出してきました。開校記念日が定められたのは昭和35年のことです。



石田学而氏のご尊父でいらっしゃる石田慶封師が遷化されたのが昭和27年1月13日。その遺徳を偲んで13日と、ご母堂が愛でられた花々が美しく咲く季節6月とを組み合わせ、「6月13日を開校記念日」と決めました。

開校記念日を通して縁のある方々に心を偲ばせ、自らが生かされていること、そして、その命を大切にしなければならぬことを再認識しましょう。

R6. 6.15 「動物墨画パフォーマンス」

旭山動物園がプロデュースするこの催しは今年で4回目を数えます。昨年までは別の会場で行われていましたが、今年は動物園内で行われるということもあり、大人の方だけでなく小さなお子様までもが数多く会場に足を運んでくれました。

「動物という命を通して感じ取ったものを、創意工夫によって表現する」ことがテーマとなるこの催しには、管内高等学校9校の書道部の皆さんが集結し、それぞれに独創性を生かした見事な墨画を書き上げました。



本校書道部はトップバッターとして大きなプレッシャーもあったと思いますが、沢山の観客が見守る中、演舞を交えながら見事な書画を書き上げました。



一人一人の筆づかいや息づかいが伝わってくる、とても感動的なパフォーマンスに会場からは惜しみない拍手が送られました。

炎天下の中、命の尊さの表現にすべてを出し切った書道部の皆さんには心から敬意を表します。

こうした取組が、多くの人に「動物の命の尊さ」や「動物との共存の大切さ」を伝えていくのだと痛感します。生徒が創り上げた書画の素晴らしさはもちろんですが、

その書画に秘められた強いメッセージは観客の皆さんの心に深く刻まれたことでしょう。

R6. 6.16 「学校説明会」

週休日を活かし「中学生・保護者向け学校説明会」を本校体育館で実施しました。時節柄お忙しい中、多くの中学生の皆さんと保護者の方々に足を運んでいただきましたことに、この場をお借りし改めて厚くお礼申し上げます。

「2コース6フィールド」から成る新たな教育課程も定着し、生徒個々が興味・関心のある分野で知識・技能を深め、自身の能力や適性を伸ばし、複雑多様化する職種や業務内容に適応できる力を培える学習体系が構築できました。

また、全教室と講義室に大型エアコンと空気清浄機を完備するなど、これまで以上に快適な学習環境も整いました。

中学生の皆さんには、時代のニーズに応えた充実した教育、学習環境の中で大切な高校生活を送ってもらいたく、その一部をビデオやパンフレット等でご紹介させていただきました。

ご来場の皆様に、龍谷高校の魅力を少しでも伝えることができましたら嬉しく思います。

今後も入試に係る様々なイベントを予定していますので、是非多くの皆様にご参加いただき、龍谷高校をより深く知っていただければ幸いです。



R6. 6.17 「祝インターハイ出場！」

先週、花咲スポーツ公園陸上競技場で行われた「北海道高等学校陸上競技選手権大会」で、本校陸上競技部が各種目において大健闘しました。全道各地区を勝ち抜いてきた有力選手と互角に渡り合い、持ち前の集中力とパフォーマンスを存分に見せてくれました。

男子はあと一步のところまで全国大会出場を逃しましたが、日頃の練習の成果を発揮し、個人競技だけでなくチーム競技でも最後まで粘り強い姿が見られました。

女子は6種目で全国大会出場の切符を手にし、今回その中から代表して数名の選手に話を伺いました。



800m の 3 年生 船奥 千代さんは「予選から選手のレベルの高さに緊張もしましたが、準決勝、決勝と進む中で自分の走りができたと思います。インターハイではスタートから勢いづく走り最後までペースを落とさずに走り通します」と、今後の練習に向けた強い意気込みを語ってくれました。

3000m の 2 年生 松原 こころさんは「去年の反省を生かし、中盤からペースが落ちないように順位を測りながら

冷静に走ることができました。全国大会では自己ベストを出せるよう頑張ります」と、中堅学年としての落ち着きも感じられます。

女子走幅跳びでは 塚越 美琶さんが1年生にして全国大会出場を決めました。「周囲の雰囲気にならないうように競技に集中しました。全国大会では、風の流れを読みながら冷静にそして果敢に攻めていきたいです」と、上級生と変わらぬ心持ちがとても頼もしく感じられます。

女子棒高跳びの3年生 岸 菜月さんは、2年連続のインターハイ出場となります。「昨年と比べると幾分気持ちの余裕はありますが、飛べる回数が少ない分、最初から仕留めていく集中力と瞬発力がカギになると思います。自分の世界に没入し、一挙手一投足に全神経を傾けます」と、全国経験を持つオーラが漂います。

4×400mの3年生 瓢子 冬羽さんは「スタート前はいつも緊張しますが、すぐ近くでチームメイトが応援してくれていたのも、とても心強く感じました。第一走者はスタート時と全体のスピード調整が難しいポジションです。インターハイでの走り順はわかりませんが、今大会の経験を生かしベストを尽くします」と、最上級生としての責任ある言葉が印象的です。

4×400mの決勝でアンカーを務めた3年生 鈴木 心琴さんは「みんなのバトンを引き継ぐ重責でしたが、一年間の努力を出し切ることができました。インターハイに向けては、オープンレーンでの位置取りやバックストレートでのスピード調整を考え、チームベストを出せるよう頑張ります」と、上位を目指すリレー選手全員の思いを語ってくれました。

いつもアットホームな雰囲気の陸上競技部ですが、競技にかける熱意は人一倍強く、精神力の強さも際立ちます。全国大会でも必ず好成績を出してくれることでしょう。

【インターハイ エントリー選手】※敬称略

■女子 800m	船奥 千代③
■女子 1500m	木田美緒莉② 合田安伽梨②
■女子 3000m	木田美緒莉② 合田安伽梨② 松原 ころろ②
■女子走幅跳	塚越 美琶①
■女子棒高跳	岸 菜月③
■女子 4×400m	瓢子 冬羽③ 鈴木 心琴③ 丹羽さくら③ 木田美緒莉② 鳴海 詩音① 金子 心乃①

今年度のインターハイは7月28日～8月1日の期間、福岡市東平尾公園博多の森陸上競技場で行われます。関係各位、並びに地域の皆様方には、いつも多大なるご支援をいただいておりますことに、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

One for all, All for one. No.47

R6. 6.19 「校内進路ガイダンス」

2・3年生を対象に進路ガイダンスを実施しました。体育館と格技場をブース形式で区切り、生徒の希望する学校や企業から詳細な説明を直に受けることで、今後の進路目標の設定や進路実現の一助にしてもらうことがねらいです。

3年生は特に進路決定までわずかな期間しかありません。心の迷いや揺らぎは日々の学習効率にも影響します。決まっている進路実現への意欲をこの機会にさらに高めてもらいたいと期待します。

また、2年生は進路目標を絞り込み、そこに向けた道筋を理解することで、取り組むべき課題を明確にし、学習意欲の向上に結び付けてもらいたいと願っています。

今回はキッズコーポレーションのご協力を得、道内の4年生大学、短大、各種専門学校、企業が一堂に会しての進学説明会が実現し、生徒にとっては参考になる情報を数多く得たことと思います。

時代の変遷とともに進路の道筋は多岐に渡り、学ぶ内容も多様化しています。興味・関心、適性に合うものを見出し、目標を明確にする絶好の機会となったことでしょう。



One for all, All for one. No.48

R6. 6.25 「皆よく頑張りました！」

高体連全道大会に出場してきた部活動が次々に帰校し、学校も通常どおりの明るい賑わいを取り戻しています。今年度も多くの生徒が活躍し、旭川龍谷の名を全道に轟かせてくれました。



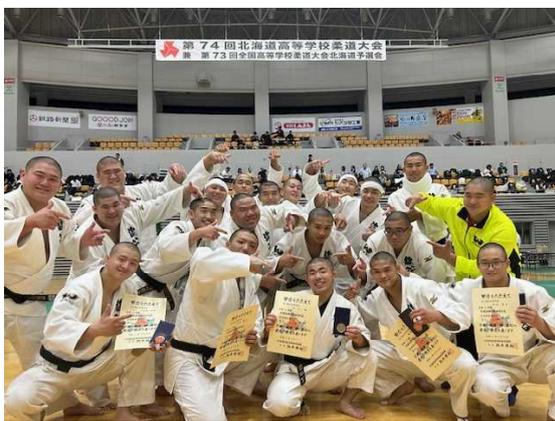
11日から札幌を会場に行われた「バドミントン大会」では、男女揃っての団体戦3位と素晴らしい成績を収めました。

近年、女子チームがめっきり力をつけてきたことで、男女が互いに良い意味で競い合い、着実に全体のチーム力を高めています。

現3年生が築いてきたこの良い雰囲気継続し、今後の大会でも男女揃って好成績を期待しています。

18日から釧路で行われた「柔道大会」は頂点まであと一歩及びみせんでしたが、団体戦堂々の3位と大健闘しました。常に強豪校としてのぎを削り、互角の戦いを繰り返している柔道部ですから、次の大会では必ずリベンジしてくれることでしょう。

個人戦でも入賞者が多数出た中、66kg級で3年生 高谷 駿君が見事優勝しインターハイの切符を手に入れました。他の選手の分まで頑張ってきてください。



21日から小樽で行われた「バスケットボール大会」では、本校のパワーがさく裂し、



インターハイ常連の強豪校を撃破しての準優勝と歴史を塗り変える偉業をやったのけました。地道にそして着実に力をつけてきたバスケット部全員の力の結集です。

インターハイへの出場は初となりますが、本物の実力を身につけた面々だけに全国での戦いも大いに楽しみです。

また、この大会で司令塔として活躍した3年生 松井 葵君が「ベスト5」に選出されたことも嬉しいニュースです。

One for all, All for one. No.49

R6. 6.28 「夏の大会が始まりました」

高野連北海道大会旭川支部予選がスタルヒン球場で始まり、連日各校による熱戦が繰り広げられています。甲子園を目指し日々練習に励んできた球児たちの全力プレーは、勝敗に関係なく見ていて清々しいものです。



本校も29日(土)の決勝戦に向け熱気のボルテージが一層高まります。全校応援では、野球部、吹奏楽、全校生徒が気持ちを一つに皆で甲子園を目指します。

OBの皆様はじめ関係各位には多大なるご支援とご声援を頂いておりますことに、この場をお借りし厚くお礼申し上げます。引き続き、応援よろしく願いいたします。

One for all, All for one. No.50

R6. 6.29 「元気いっぱい！」

6月は運動会シーズン。体育館から小さな子供たちの明るく元気な声が響いてきます。「きくし幼稚園」の可愛らしい園児の皆さんです。この幼稚園は、本校の創始者でもある菊枝山慶誠寺第三世住職 石田 学而氏が創設されました。

戦後間もない混迷の時期、幼児期からの教育の重要性を信念として掲げ、以来仏教精神に基づく「こころの教育」は脈々と引き継がれています。

校舎移転前は幼稚園も隣接しており移動も楽でしたが、移転後は負担も大きくなったことと思えます。それでも、園児たちは変わらぬ笑顔で一生懸命に身体を動かしていました。何とも微笑ましく、癒される光景です。



